

# 木質チップ・ペレット焼却灰の 釉薬（うわぐすり）への活用開発

開発者 — 銀山上の畑焼陶芸センター  
代表 伊藤 瓢堂  
開発協力 — (有) テンプレス  
塩原 未知子

古来より焼物の釉薬（うわぐすり）の基礎釉は、草木を焼いた灰である。その灰にさまざまな色を発色する金属・鉱物の粉末を調合することによって多種多様な味わいのある今日の焼物になった。今回は、再生エネルギーとして注目されている倒木・間伐・剪定木のチップ・ペレットの燃料の焼却灰を焼物の釉薬の基礎原料に使用した作品の発表である。

使用木質ペレット — 酒田地域のクロマツペレット  
焼成温度・時間 — 還元焼成1,250℃・20時間

## 灰使用 条件

上の畑焼（磁器質）と水戸藩（茨城県）復興七面焼（陶器質）に、水で溶いた灰をかけた。上の畑焼の方は呉須絵付けした素地・彫を施した陶板・下絵付用の色絵の具で絵付けした素地・七面焼には、極めて濃い水溶の灰をかけた。

## 結果

上の畑焼の呉須絵付のものは、本来の藍色の発色はわずかに見られ、全体が藍褐色の深い味わいのある「ワビ・サビ」に通じる絵付作品となった。下絵付用色絵の具使用のものは、赤・黄・緑の発色は安定している。総じて、素地全体の釉調として青味を帯びた灰白色の軟らかい色調で温みがある。七面焼の陶器に濃く厚目に施した物は、古来より伊羅保釉として愛用された釉調に近く雅美にとんでいる。磁器質に施したものは、美しいグリーンが発色が認められ、古伊賀の焼物に見られる「ビードロ」釉のようである。

## 展示 発表

今回の試作品を、4月10日（木）～15日（火）まで茨城県水戸市内の京成百貨店6Fアートギャラリーでの、私の24回目の個展で展示発表した。御来場いただいた茨城県知事橋本昌氏・水戸市長高橋靖氏・常陸太田市長大久保太一氏、常陸大宮市長三次真一郎氏、元茨城県窯業試験場場長鷺野谷昇氏他多くの方々にご覧いただき好評であった。感想としては次のようなものであった。

- ◎ 良い釉薬になる。茨城県でも木質チップは少しずつ作り始めているので、この灰も使ってみたい。
- ◎ 茶と藍の微妙な発色が何とも言えない味である。
- ◎ 焼物は究極のリサイクルなんですね。
- ◎ 灰が焼物の釉薬になることそのものが驚き。
- ◎ 全体的に幽玄な感じ。
- ◎ 抹茶碗の釉薬として良い。
- ◎ これは絶対に欲しい作品。

## 今後の 展望

この木質チップ・ペレットの焼却灰は他の不純物が入らないので釉薬としても安定性があるので上の畑焼の釉薬の一つとして取り入れてゆきたい。またこの灰を基礎として、多様な釉薬も作ってみたい。今回の釉薬の使用した器を銀山温泉の食味処で使用して貰う予定である。



上の畑焼（磁器質）



七面焼（陶器質）



京成百貨店6Fアートギャラリーでの  
試作品展示



バイオマスエネルギー・木質ペレット